

## 論文番号 78

担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題名 (原題/訳)

Assessment methods for alcohol consumption, prevalence of high risk drinking and harm: a sensitivity analysis

アルコール消費、ハイリスク飲酒の罹患と有害性の評価法：感度分析

執筆者

Jurgen Rehm, Thomas K Greenfield, Gordon Walsh, Xiaodi Xie, Lynda Robson, Eric Single

掲載誌 (番号又は発行年月日)

International Journal of Epidemiology 1999; 28:219-224

キーワード

アルコール消費、評価、ハイリスク飲酒、罹患率、死亡率、感度分析

要旨

(背景) 疫学研究でアルコール消費を評価する標準化された方法が無い。現在までの研究で主な客観的方法としては、罹患率や死亡率を定義するものとして、ハイリスク飲酒と有害性を推測する有病率という面からアルコール消費を評価する、3つの広く用いられている方法を比較した。

(方法) 量頻度法、累積頻度法、1週間飲酒量思い出し法を同一対象を用いて比較するデザインである。カナダオンタリオ州在住の1990-1994年に行った多目的断面研究に参加した3,961人を対象として得られたデータを用いた。クロス集計、スピアマン相関、罹患に基づく費用疾患研究の標準的な方法を用いた。

(結果) 累積頻度法は内容的にハイリスク飲酒と有害性の罹患をより高く分類する方法であった。全ての指標において相違がみられたが、ほとんどの方法で、男性で1日平均60g以上、女性で1日平均40g以上の純アルコール量の消費によって有害性が定義された。有害飲酒が推定される罹患率は累積頻度法では1週間飲酒量思い出し法のおよそ5倍以上、量頻度法のおよそ3倍であった。

(結論) アルコール消費の異なった測定法の特徴は疫学において今後の調査で確立されるべきである。